

『出会うはずもない人』

聖ヶ丘サテライトクリニック 院長 岡本 拓也



そもそも出会うはずもない人でした。が、それでも出会ったのは縁とでも言うほかなく、私にとって忘れられない人となりました。

それは、突然、まったく見知らぬ東京都心のクリニックからかかってきた一本の電話に始まります。内容は次のようなものとある男性(以下、Kさん)がウィンザーホテルに宿泊している。ついては、その方の往診に行ってもらうことはできまいか…。聞けば、その方は、つい10日前に胆管癌の診断を受けたばかり。診断された時点で既に癌は肺や肝臓、腹膜など全身に転移しており、腹水もたまっている。明らかに、かなり厳しい状態。普通なら直ちに今後の治療についての話を始めるところだろうけれども、診断を受けた数日後には、本人にとってもよくわからないインスピレーションに従って、Kさんは洞爺にやって来られた…

旅行中の身であるKさんに医師としてどこまで責任をもって関わるかは保留のまま、とにかく痛みで困っているということなので、とりあえずその部分への対応だけでもと思い、往診を承諾しました。

雪道を運転して、山頂にそびえるホテルに向かいました。洞爺湖が眼下に広がるホテルの一室で、黄疸で黄色味を帯びたKさんにお目にかかりました。さすがにKさんは弱っている感じではありましたが、頭は芽えておられ鋭い質問をいくつもして来られました。しばらく洞爺で療養するのでその間は診に来てほしいとのこと。まあこれも縁かと思ってお引き受けしました。(後から知るのですが、Kさんはある業界の仕組みを根本的に変えた高名な実業家。日本国内のみならず世界中を飛び回って活躍されて来た方であり、ベストセラー本を含めて多数の書籍も出版されています。)

その初めての出会いから数えて東京に戻られるまでの19日

間という短期間にも、Kさんはどんどん変化して行かれました。いわゆる「生き馬の目を抜く」実業界に身を置いて来られたKさんですが、もともと精神世界に強い関心を持っておられたようで、ますます見えざる世界に開眼して行かれました。今思えば、そのためにこそKさんは洞爺に来たのかもしれませんが、やがて、会う度に透明感を増して行かれたKさんは、生も死も超越した天国人の心境になられ、(黄疸の進行もあり)黄金色に光り輝いて行かれました。

年が明けて1月3日、今日で年末年始の休みも終わり明日から今年の仕事始めという日。屋根の雪下ろしをしていましたら私の携帯電話が鳴りました。

「先生には大変お世話になりました。私の身体は東京にありますが、心は今もそちらに、洞爺にあります。そろそろ身体が限界のようですので、数日後には眠らせてもらって、そのまま向こうに行こうと思っています。…先生、がんばってくださいね。応援していますからね!本当にありがとうございました。さようなら…」

そのまま映画化できるような波乱万丈の生涯を歩んで来られたKさんからの、今生での別れの挨拶でした。雪が堆積した屋根の上に呆然と立ちつくし、懐かしいその声に聴き入りました。燦々と陽光が降り注ぎ、青い空の下、洞爺湖はいつまでも眩い光をキラキラと水面に輝かせていました。

最後に、葬儀の場で流されたというKさん自身の挨拶の一部をご紹介します。亡くなる2週間程前にKさんが希望されて録音させたものだそうです。

「もう思い残すことは何もありません。ただ一つだけ、皆さんにお伝えしたいのは、僕が学んだもの、それはこの地球で生きるというのが、いかに素晴らしい経験であるかということです!」